

関西学院と私 : 生き方に影響を与えてくれた人

著者	林 宜嗣
雑誌名	エコノフォーラム21 : 学生と教職員のインターコミュニケーション誌
号	25
ページ	60-61
発行年	2019-03-14
URL	http://hdl.handle.net/10236/00027858

2018年
12月17日
月曜日

●退任教授最終チャペル講話／林 宜嗣 教授（財政学・都市経済学）

関西学院と私 —生き方に影響を与えてくれた人—

経済と人間シリーズや学部長時代にこれまで幾度かチャペルで話をしてきました。講義や講演と違って、チャペルで話するのは少し緊張します。やはり、学生さんの記憶に残る話をしなければというプレッシャーがあったのだと思います。今日、とうとう最後の機会となりましたが、この緊張はなくならないままでした。今日も、やはり何か少しでもためになるメッセージを送りたいと思っていましたが、その思いは捨てて、今回は退職に際してということで、今回は、私個人のことをお話しすることにしました。

私の父親も関学の卒業生です。私はまだ小さい頃から、父は私に関学の話をし、セミをとりこのキャンパスに私を連れてきました。その頃から、私は関学に入りたいと思うようになりました。関西学院との長い関わりのおかげと、愛する母校をもつことができるすばらしさを教えてくれたのが父親でした。

1969年に関学経済学部に入学しました。そのための面接では、なぜ経済学部を志望するのかを聞かれましたが、明確な夢や計画を持っていたわけはありませんでした。私は現在、指定校やAO入試などで面接をしていますが、多くの高校生がしっかりとした将来像を持っているのには感心しています。

大学入学後は、ごく普通の学生生活を送っていました。大学の後半になって、私は会計士になろうと思

い、専門学校にも通いました。そして、まずは税理士資格を取ろうというところで、大学院に進学することを決めました。今は制度が変わりましたが、当時は、大学院で財政学の修士論文を提出すると、税理士試験の内、税法関係の試験3科目が免除になるからでした。ところが、大学院に進むと、大学院の勉強と会計士の勉強を両立させることは困難だとすぐに気づきました。

学部と大学院の指導教授であった柏井先生は、私に、「さあ、どうする？会計士の道に進むか、研究者になるか、によって、ゼミの指導の仕方を変えるのよ」と言ってくれました。先生が私の将来のことを考えて、そのようなたずねてくれなかったら、研究者としての林はなかったと思います。

しかし、研究をすれば自動的に大

学教員になれるわけではありませぬ。大学院を終えると、どこかの大学の就職先を探さなければなりません。柏井先生は、関学を退職された後、大学院卒業後に私を採用することを条件に、新幹線に乗って遠方で通勤してくださいました。先生はもう高齢でしたから体力的にも辛かっただろうと思います。最終的に私は関学に職を得ましたので、その大学にお世話になることはありませんでしたが、先生が就職先を確保してくださったことで、私は安心して研究を進めることができたと思っています。

このように、柏井先生には、研究者、教育者になるきっかけと勇気を与えていただくとともに、人を育てるうえで、気配りと優しさが大切であることを教わりました。

もう一人の恩師は、私が大学院の

後期課程に入ってから指導教授をしてくださった橋本徹先生です。橋本先生は政府や自治体の委員を数多く務め、とても忙しくしていました。そのため、先生の研究の手伝いをするようになりました。仕事の期限は決まっていますから、徹夜をして原稿を仕上げ、早朝に先生の自宅の郵便ポストに持って行ったことも何度もありました。

仕事は、自分の研究テーマでないものもありましたし、ダメ出しを出されたこともありましたが、「何でこんなしんどい目に会わなければならないのだろうか」と思ったこともありましたが、しかし、そのおかげで、私の研究領域は広がりましたし、研究は世の中の役に立つものではないといけない、ということも教えていただきました。このことは私のその後の研究に大きく影響しています。

また、先生は「30歳までに結婚したら破門だ」と弟子に言っていました。私は先生の言いつけを守らず27歳で結婚しましたが、幸い破門にはなりませんでしたが、先生の言いたかったことは、「彼女を作る前に、論文を作れ」ということだったのだらうと思いますので、結婚を認めたらうために研究には力を注ぎま

した。先生からは、研究とはそれほど厳しいものだとということを知りました。

私の生き方に影響を与えてくれた人は数多くいますが、最後に、私の教師としての生き方を教えてくれた人の話をします。それは学生さん、特にゼミ生でした。私は教師という職につくことは大学院に入学するまで考えたことはありませんでした。

先ほど話したように、大学院入学後に恩師の助言のおかげで研究者の道に進むことになりましたが、これは同時に大学の教員になるということでもありました。しかし、経済学部に就職してしばらくは、教員には向いていないのではないかと思う日が続きました。こうした気持ちを前向きにしてくれたのがゼミでした。

ゼミを担当した最初の頃は、テキストをゼミ生が報告し、私が解説するという形式で進めていました。その中で、ゼミで共同研究を本にまとめるという企画が持ち上がり、内容と目次をゼミ生が議論しました。しかし、なかなか考えがまとまりません。そこで、私が本の構成を考えて提案しました。すると、ほとんどの人が意見を出すことなく、賛成しました。すると、一人のゼミ生が、皆にこう言いました。「先生が提案し

たら、何の意見もなく賛成するか」と。

私は学生のその一言から、「教師が機関車になってゼミを引っ張っていくのは、ゼミ生の成長のためにはならない」ということに気づきました。教育というのは、「教え」、「育む」、ということです。教えるだけでは学生は育たないのだと強く思いました。私にとって幸いだったのは、そう気づかされたのが、私自身が未熟な、教師になり立ての頃だったということです。私はそのとき、ゼミを進めながら自分自身も育っていけばよいのだ。そのためには失敗を恐れず、試行錯誤をしていこうと開き直りました。

このように思うことで、気持ちが楽になるとともに、教師という仕事を楽しくなりました。私の最後のゼミ生は31期生です。まだ試行錯誤から抜け出せることはできていないのですが、試行錯誤で良いのだという気持ちを持たせ、教師としての歩みを支えてくれたのがゼミ生でした。そのときから、私は教師になって本当に良かったと思うようになりました。

教育は教えることですが、皆さんが大学で大きく育つことができるかどうかは、皆さん一人ひとりの意

欲と取り組みにかかっています。教師は、学生が育つための環境を与え、成長を支える。そして学生は、その環境と支援を活かして成長する。それによって母校である関西学院を愛して卒業していく、そんな関西学院経済学部であって欲しいと思っています。